

英語教育における CAN-DO リストの
活用の実態と課題について

目 次

I	はじめに.....	21
II	研究概要.....	22
	1 研究目的	
	2 研究内容と方法	
III	CAN-DOリスト活用状況.....	23
	1 英語教育実施状況調査	
	2 英語担当者への調査	
	3 英語担当者への調査結果と分析	
IV	授業実践.....	29
	1 研究動機	
	2 授業実践の内容	
	3 授業実践の考察	
	4 授業後の児童用調査の内容と結果分析	
V	研究の成果と課題.....	36
VI	おわりに.....	37
VI	引用及び参考文献.....	37

I はじめに

社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来、新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明で予測困難な時代にあって、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる必要があるとされている。

このような状況の中、外国語によるコミュニケーション能力が生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定されており、その能力の向上が課題となっている。新学習指導要領では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、①各学校段階の学びを接続させるとともに、②「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実を図っている。小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして国際的な基準である CEFR¹を参考に、4技能5領域で目標を設定している。

平成20年改訂の学習指導要領では、小・中・高等学校で一貫した外国語教育を実施し、4技能を総合的に育成することをねらいとして改訂されたが、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じる状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に活かすことができない状況があった。

平成23年6月に「外国語能力の向上に関する検討会」がとりまとめた「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」において、各中・高等学校が学習指導要領に基づいて生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体的に設定することが提言された。「CAN-DOリスト」とは、能力や技能を「～することができる」の形で記した能力記述文（can-do descriptors）をリスト化したもので、どのような生徒を育てたいのか、どのような力を身に付けさせたいのかを教師が具体的な目標を持つことで、それに合わせた指導や評価を行うことが設定の背景となる。各学校が、学習指導要領の目標を地域の実態や生徒の能力に応じて具体的な目標に設定し直すことにより、すべての子どもたちの英語力の水準向上に資するだけでなく、グローバル社会に通用するより高度な英語力の習得を目指すことが可能となる。新学習指導要領では、外国語科のみ CAN-DO 形式で国の目標が示されており、それを基に各学校で詳細な学習到達目標を具体的に設定することになっている。

各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き（文部科学省初等中等教育局 平成25年 3月）から「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標を設定する目的を三点挙げている。①外国語能力向上のために、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること。②4技能を有機的に結び付け、総合的に育成する指導につなげること。

¹ CEFR - Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠)

外国語の習熟度や運用能力を測る国際的な指標

③教員と生徒が外国語学習の目標を共有することで、生徒自身が言語を用いて、「～ができる」という自覚が芽生え、言語習得に必要な自律的学習者としての態度・姿勢が身に付くことを目指しており、CAN-DO リストを活用することが、新学習指導要領で示されている学びの連続性、授業改善につながることを期待される。

津市では「津市版英語教育カリキュラム～TSU-STANDARD 改訂版～」で小・中学校7年間の外国語学習期間におけるそれぞれの目標を示しており、「津市版技能別 CAN-DO リスト」が設定されている。今年度は、津市英語教育推進計画が最終年度を迎えるため、「CAN-DO リスト」の活用に関わる実態と課題を明らかにし、来年度以降の授業に活かせる効果的な「津市版技能別 CAN-DO リスト」にするための検証を行う必要がある。

そこで、本研究では、CAN-DO リストの活用の実態を把握し、本市の児童生徒の学習改善、教員の指導改善につながる活用方法について実証的な研究を行う。

II 研究概要

1 研究目的

本研究の目的は、市内の教員が、CAN-DO リストを効果的に活用し、来年度以降の本市における外国語科・英語科の教員の授業改善と児童生徒の学習改善の充実につなげることである。

2 研究内容与方法

CAN-DO リストを効果的に活用するために「バックワードデザイン（逆向き設計）」による授業で検証を行う。「バックワードデザイン（逆向き設計）」とは、何を身に付けさせたいかという教育の成果から逆向きに授業を設計し、評価方法を先に構想するウィギンズ(Wiggins, G.)とマクタイ(McTighe, J.)が提案しているカリキュラム論である。単元・授業を構成する際に、ゴールを明確にすることで、指導者自身が、終末で目指す児童の具体的な姿、単元を通して児童生徒に身に付けさせたい力をイメージすることができ、目標の実現に向けての必要な手立ても見えてくる。ゴールが決まれば、そこから逆算して、1時間ごとの目標を定め、活動を組み立てながら単元を構成していく。子ども達が「～できる」という目標からカリキュラムが設計されるため、CAN-DO リストが効果的に活用できる。また、中嶋洋一（関西外国語大学）も、なぜそれを教えるのか、どんな力をつけたいのかという目的を持った「正しい山（ゴール）」を意識した授業作りの重要性を述べている。

中嶋(2011)による、バックワードデザインによる授業の流れをもとにし、今回使用する教材である、東京書籍「NEW HORIZON Elementary ⑤、⑥」の単元のデザインに焦点を当て、筆者が以下のような流れを作成した。

Step1	単元目標の確認と目標到達に適したタスク（パフォーマンス課題）を設定、児童生徒と共有する。
Step2	児童生徒の具体的な姿から、タスクの評価基準（ルーブリック）を設定する。

Step3	単元の終末で行うタスクに向かうために必要となる言語活動や練習を考 える。
Step4	タスクに向かうための言語活動や練習を各時間に配列する。
Step5	単元目標達成に向け、時間配分や評価場面等を考慮して1時間の授業を構 成する。
Step6	毎時間、授業終わりに振り返りシートを用い、学習状況の把握を行う。
Step7	単元の最終時限にタスクを行い、ループリックを用い評価を行う。最後に 振り返りシートで自己目標が達成されたか確認をする。

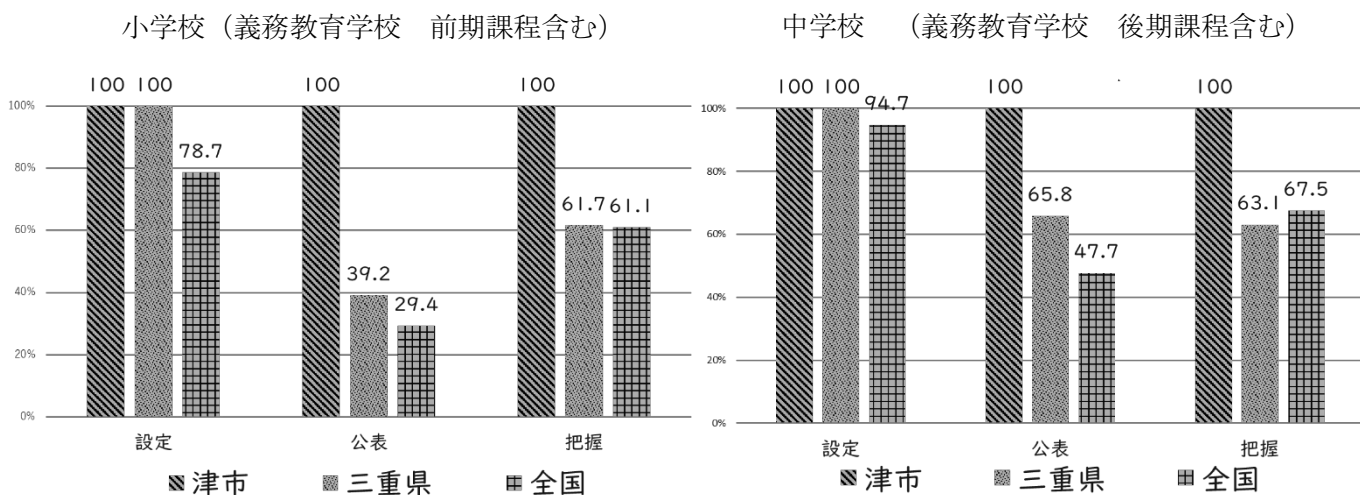
【「バックワード・デザインによる『指導案改善』研修のすすめー本気で、今の授業を
変えたい人へー」中嶋洋一（関西外国語大学）をもとに筆者が作成】

III CAN-DO リスト活用状況

1 英語教育実施状況調査

以下のグラフは、文部科学省が行っている「英語教育実施状況調査」による CAN-DO
リストを設定・公表・把握している学校の割合である。

この結果から、津市の全ての小・中・義務教育学校が CAN-DO リストを設定、公表、
把握しているとの結果が出た。この結果（量的調査）では、津市内小中学校の「CAN-
DO リスト」の活用についての好結果は出ているものの、実際の「CAN-DO リスト」の
活用状況の詳細を検証（質的調査）するために、津市内の英語担当者に調査を依頼し
た。



【令和3年度 英語教育実施状況調査をもとに筆者が作成】

2 英語担当者への調査

(1) 調査の目的

英語教育状況調査を基に、本市における CAN-DO リストの活用状況について、実態
を把握し、今後の教育活動に資することを目的として、「津市 e-Learning ポータル」

を活用し CAN-DO リストの活用状況について、本市の全英語担当者(n=70)に調査を実施した。

(2) 調査の内容

以下の項目についてのアンケート調査を実施した。

①CAN-DO リストの活用方法（以下の項目から複数回答可）

- ・授業開きで確認している
- ・単元のはじめで確認している
- ・授業の途中で確認している
- ・振り返りシートで確認している
- ・定期テストやパフォーマンステスト等の評価の場面で確認している
- ・小学校では中学校の到達目標を、中学校では小学校で行ってきたことを小中連携の観点から会議等で確認している
- ・その他

②CAN-DO リストの効果について

- ・児童生徒の学習改善の点
- ・教員の授業改善の点

③CAN-DO リストにおける工夫や改善

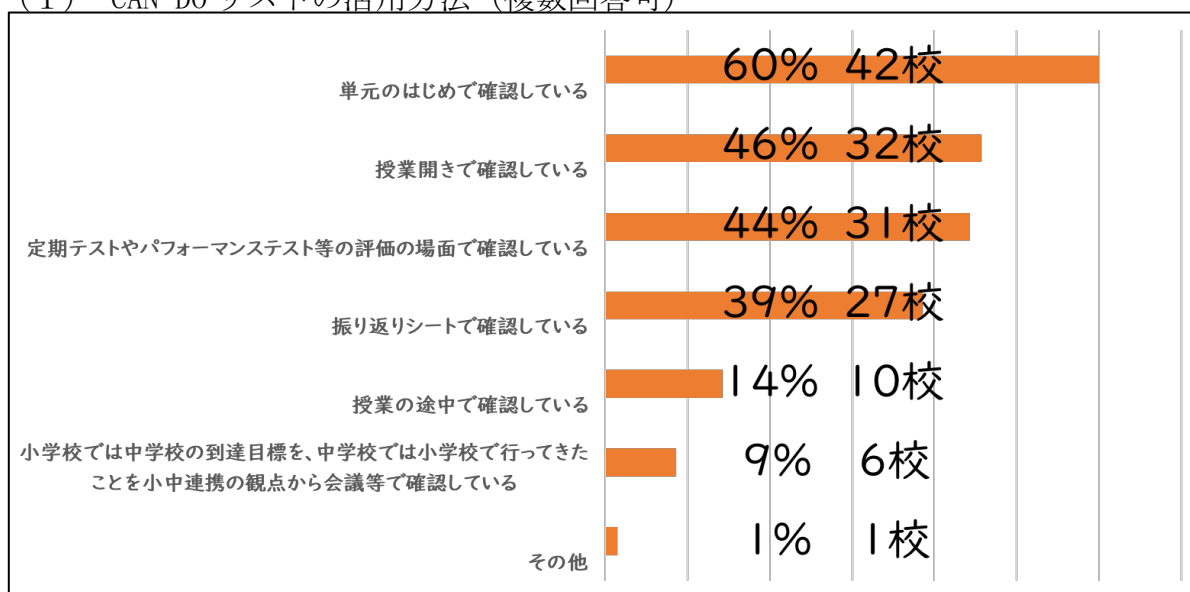
④CAN-DO リスト活用における課題

*②、③、④の項目は、自由記述回答とした。

3 英語担当者への調査結果と分析

調査は、本市が所管する小・中・義務教育学校の英語担当者を対象として実施し、70名全員から回答を得た。

(1) CAN-DO リストの活用方法（複数回答可）



【CAN-DO リストの活用方法についての調査結果】

CAN-DO リストをどこで活用しているかについては、「単元のはじめで確認している」が最も多く、次いで「授業開きで確認している」、「定期テストやパフォーマンステスト等の評価の場面で確認している」という結果であった。複数回答可ということで、2つ以上の場面で活用している学校が多く、「授業開きで確認している」と「定期テストやパフォーマンステスト等の評価の場面で確認している」の組み合わせが最も多かった。

(2) CAN-DO リストの効果について

・児童生徒の学習改善の点

見通しをもった学習 (24人)
<ul style="list-style-type: none"> ・最終的なゴールが設定されていることにより、学習に焦る必要がなくなる。 ・各学年の単元的な目標に向けて、見通しが持てることで、そのためにどのような練習が必要か(単語やフレーズなど)を意識することができる。
目標の確認・明確化 (17人)
<ul style="list-style-type: none"> ・目標が明確で、目標を達成するための手立てが考えやすい。 ・学習目標の確認ができ、到達度を自分自身で確認することができる。 ・目標を明確に持って課題に取り組むことができる。また、求められるレベルに対して自分のレベルがわかる。
自己調整・主体的な学びへの役立ち (10人)
<ul style="list-style-type: none"> ・自分ができたこと、もう少しなところを振り返ることで、次の学習につなげることができる。ふりかえりに応じて、目標をたて、それをまたふりかえるというサイクルにつながる。 ・自分が身につけるべき力を意識しながら授業にのぞめる。単元後にどれだけCAN-DO リストの項目をクリアできているか確認することができ、自己調整に役立つ。
やるべきことの明確化 (9人)
<ul style="list-style-type: none"> ・その授業や活動で、どのようなことができればよいのか、できるように練習をしていくのが明確になり、目標を意識して学習できる。 ・目指すべき明確で具体的な目標となるので、授業者と意識の共有が図れ、自分が何をすべきか理解しながら学習をすすめられる。
意識づけ・動機付け (6人)
<ul style="list-style-type: none"> ・明確に身につけたい目標があるため生徒の励みにもなり、学習の良い動機付けにもなる。
到達目標・到達度の確認 (6人)
<ul style="list-style-type: none"> ・自分がどれぐらい理解できたか、理解度をはかることができる。 ・授業の振り返りの場面で自分が達成できているのかを確認することが容易になる。
その他 (5人)
<ul style="list-style-type: none"> ・単なるチェックリストにならないように、日々の学習内容やその進捗状況を振り返る習慣を家庭でも身につける必要がある。

・教員の授業改善の点

授業内容、指導力の見直し・改善 (28人)
<ul style="list-style-type: none"> ・その単元のゴールとなる学びの指針で、何を中心に授業を組み立てていくか、やるべきことがそこにまとめられている。 ・単元を通してつきたい力を把握し、それに合わせた学習活動を授業の中に取り入れることができる。また、授業後の児童一人一人の学習状況を CAN-DO リストを通してみることで、十分でない部分を伸ばすために何が必要かを考え、改善するための指標になる。 ・児童の現状把握に活用し、授業の改善につなげることができる。 ・1年間を通してどこまで指導すればいいのか、また中学校を見通した指導ができるようになったので指導改善にもつながった。
評価の確認 (26人)
<p>A, 目標や目指す姿の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標が明確化することで、授業の流れを考えやすくなった。単元のゴールをどこに置くかが明確になった。 ・生徒につけさせる力を確認し、生徒と共有することができる。 <p>B, 評価基準の明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの会話やスピーチ、パフォーマンステストなどに対する取組をより明確に評価することができる。
系統立てた指導 (14人)
<ul style="list-style-type: none"> ・単元ごとにゴールを設定することで、計画的に生徒をゴールへと導くことができる。 ・行う学習を学校や学年単位で一つの基準を持って行っていく事ができる、独自性を持たせても大きく逸脱せずに年間での計画に沿って学習を進めることができる。 ・時数の無理なく進める事ができる。
課題 (6人)
<ul style="list-style-type: none"> ・CAN-DO リストについて周知徹底が完全ではない。
他教員との共通認識・理解 (4人)
<ul style="list-style-type: none"> ・学年の先生と ALT の先生で、活動を通して身につけさせたい力を共通認識し、教材研究を進めることができる。また、児童の様子が把握しやすい。 ・授業準備をする上で、基準があるのでやり方が統一できること、評価の際に生徒と共通認識を持ってできること。
効果的な指導 (2人)
<ul style="list-style-type: none"> ・単元と単元のつながりが分かり、効果的な指導を考えることができる。
教育行政への要望 (1人)
<ul style="list-style-type: none"> ・中学校区として一貫性のあるカリキュラム開発が必要である。

CAN-DO リストの効果については、児童生徒の学習改善の点では、「見通しをもった学習」、「目標の確認・明確化」という回答が多く、「見通しを持って、最終課題の準備

などができている」という意見もあった。教員の授業改善の点では、「指導改善につながる」、「評価が明確になる」という回答が多かった。

(3) CAN-DO リストにおける工夫や改善

CAN-DO リストの掲示 (20人)
<p>A, 紙媒体で掲示・提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ファイルの一番見えるところに CAN-DO リストを貼り、いつでも確認できるようにしている。 ・必ず授業開きで確認、黒板に掲示か板書、いつでも振り返ることのできる工夫。 <p>B, 電子媒体 (PDF/データ) で配付</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が適宜確認できるよう、タブレットを使って配付している。
授業内容、指導力の見直し・改善 (11人)
<p>A, 授業づくりの基準・指針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標に到達できるよう、必要なコミュニケーションがとれるよう、児童の実態に合わせて、活動内容を考えている。 <p>B, 授業の改善 (教員の振り返り)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CAN-DO リストに書かれた内容を参照しながら、教科書等で行う活動の重点化を図るようにしている。
振り返りシートを活用した子どもたちの振り返り (8人)
<ul style="list-style-type: none"> ・CAN-DO リストの内容をとりいれた、単元ごとのめあて一覧シートを子どもたちに配り、各時間の学習内容について見通しを持ち、そのめあてについて振り返ることで学習を深められるようにしている。
職員間の共有 (6人)
<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領における英語科教員の解釈の共有。 ・中学校と連携し、児童の現在の理解度がどれくらいか、中学校へ上げるまでにどんな力が必要かを交流している。
定期テスト (パフォーマンステスト等) で活用 (4人)
<ul style="list-style-type: none"> ・パフォーマンステストのループリック作成で参考にして、生徒が活動前に具体的に目標がわかり学習しやすくしている。
子どもの実態に合わせた定期的な改良 (4人)
<ul style="list-style-type: none"> ・各担任が、子どもの実態に合わせて改良している。
CAN-DO リストの記述内容の変更 (3人)
<ul style="list-style-type: none"> ・リストをシンプル、かつできるだけ明確な表現で表し生徒にも教員にもわかりやすくなるようにしている。
その他 (7人)
<ul style="list-style-type: none"> ・特に改善はしていない。 ・まだ実践ができていないが、年度中に CAN-DO リストに基づいた教員への振り返りシートを作成したい。

CAN-DO リストの工夫や改善については、CAN-DO リストを児童生徒の目につくところに掲示したり、職員で解釈の共有ができるように職員室にも掲示しているという回答があった。しかし、回答の中には、工夫や改善といえる回答は少なかった。

(4) CAN-DO リスト活用における課題

CAN-DO リストの作成・活用について (14人)
<ul style="list-style-type: none"> ・専門性のない教員にとっては、活用することが難しく苦勞している。 ・全教員共通把握のもと、一律した指導ができていますか。 ・生徒の達成度のフィードバック。
時間の確保 (13人)
<p>A, 教材研究について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの学級は、英語専科ではなく、担任が授業を行っているため、十分な教材研究の時間が取れず、常に活用できているとはいえない現状である ループリックなどがあると、評価にも活用できるのではないかと考える。 <p>B, 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が確認作業をする時間を十分に確保することが難しい。 <p>C, 作成について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成するのに手間がかかる。
CAN-DO リストの内容 (8人)
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に合った、適切なゴールの設定の仕方。
利便性 (5人)
<ul style="list-style-type: none"> ・臨機応変性が難しい。
教育行政への要望 (5人)
<ul style="list-style-type: none"> ・外部の人が見てもわかる CAN-DO リストにしたいのだが、簡易でわかりやすい descriptor の作成に研修が必要。 ・教材ごとに市内で共有することができるとありがたい。 ・なかなか CAN-DO リストを活用した授業や学習到達目標の立て方のモデルなどが少ない。
子どもの実態との齟齬 (4人)
<ul style="list-style-type: none"> ・学年から次学年に上がるときに、子どもたちの到達点がそれぞれ違うため、どこから始めるのか戸惑ってしまう。
職員間の共有・認識不足 (4人)
<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか教員や生徒に周知を徹底することが難しい。 ・CAN-DO リストの認識不足。
小中連携に関して (3人)
<ul style="list-style-type: none"> ・小中7年間としつつも、実際に交流する機会の少ない小中での連携をどのようにとっていくか。
意識づけ (2人)
<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の単元のはじめと終わりに明確に提示するなど、より生徒に意識させる手立

てが必要である。

その他 (14人)

- ・通知表にそのまま反映しづらい。
- ・特になし。(10人)

CAN-DO リストの課題については、時間の確保が難しいという回答が多くあった。また、配付だけで終わっている、専門教科ではない小学校教員にとっては活用が難しいという回答もあり、CAN-DO リストの活用方法について課題を抱えている教員が多くいることがわかる。

IV 授業実践

1 研究動機

英語教育実施状況調査(文部科学省)(量的調査)、津市内小・中・義務教育学校の「CAN-DO リスト」の活用についての好結果は出ているが、本市の英語担当者への調査結果によると、活用方法に課題を抱えている教員の割合が高いことがわかる。そこで、今年度の「津市版技能別 CAN-DO リスト」の活用方法について検証(質的調査)及び効果的に授業に活かすことで、授業改善と学力改善が図られると考えた。

2 授業実践の内容

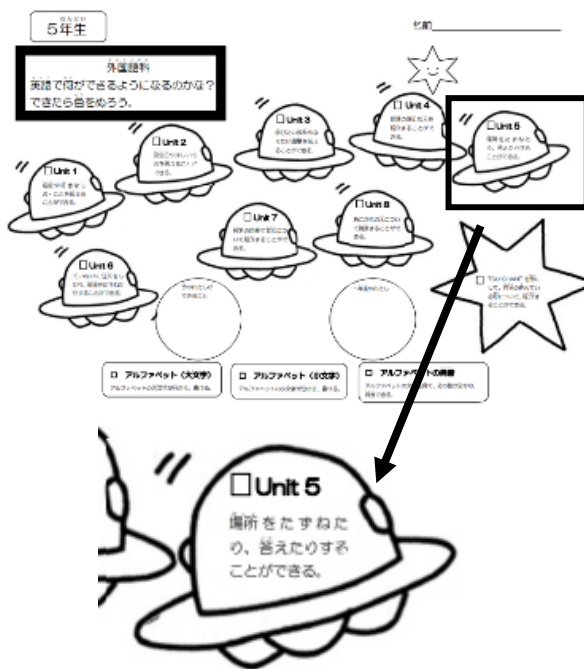


図1 津市版CAN-DOリスト 5年生

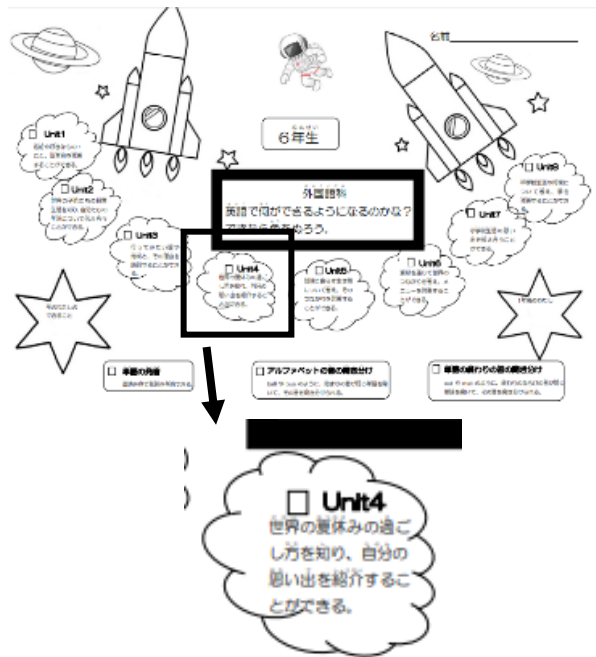


図2 津市版CAN-DOリスト 6年生

授業実践は、5年生Unit5「Where is the Post Office?」単元目標は図1の「津市版CAN-DO リスト5年生」のUnit5から「場所をたずねたり答えたりすることができる」、6年生Unit4「Summer Vacations in the World」単元目標は図2の「津市版

CAN-DO リスト6年生」の Unit 4 から「夏休みの過ごし方を発表することができる」と学校の実態に応じて設定した。単元目標に到達するために各6時間の目標を設定し、言語活動や、パフォーマンス課題の練習を組み入れたバックワードデザインによる授業を行った。ゴールから逆算して「つながり」を持たせて授業を組み立て、少しずつ段階を追いながら、児童が「できた」という自信を積み重ねて、最終的に単元目標に到達できるように授業計画を構想した。

(1) CAN-DO リストの内容確認

授業実践にあたっては、それぞれの学年の CAN-DO リストの一覧表(5年生 図1、6年生 図2)を配付し、配付したその日に、家庭学習として、リストの内容の確認と自分が出来ているところまでを☑か、色塗りをするように指示を出した。

(2) CAN-DO リストの提示

児童が、常に今何を学習しているのか、それが最終目標にどのようなつながりなのか意識させるために、授業の初めに必ず、Today's Goal (本時の目標)を掲示、全体で読み上げ確認、授業の途中で確認、振り返りシートで確認という方法をとった。また、パフォーマンス課題を用い、CAN-DO リストを基にしたルーブリック表で評価を行った。

(3) 最終課題と評価

1回目の授業で、単元の最後にするパフォーマンス課題の活動をデジタル教科書の動画で視聴した。「ゴールの姿」を教師と児童間で共通認識しておくことで、学習する土台作りがしやすくなるからである。

CAN-DO リストを用いて日々の授業実践を行っていくには、評価方法(パフォーマンス課題)を考案することが大切であり、パフォーマンス課題を日々用いて指導、評価を行うことによって、児童生徒も目標達成状況を把握することが、CAN-DO リスト活用において重要であると考えられる。



NEW HORIZON Elementary 5 Unit5
Speaking (やり取り) ルーブリック表
GOAL: 場所をたずねたり、答えたりすることができる



	A	B	C
知識・技能	今まで学んだことを使って、自分の知りたい場所や位置をたずねたり、答えたりすることができる。	少し間違えることはあるが、今まで学んだことを使って、自分の知りたい場所や位置をたずねたり、答えたりすることができる。	友達や先生に助けをもらっても、自分の知りたい場所や位置をたずねたり、答えたりすることが難しい。
思考・判断・表現	今までに学んだことを使って、相手の理解に合わせてたずねたり、答えたりしている。	少し間違えることはあるが、学習したことを使って、相手の理解に合わせてたずねたり、答えたりしている。	友達や先生に助けをもらっても、相手の理解に合わせてたずねたり、答えたりすることが難しい。
主体的に学習に取り組む態度	アイコンタクトをとり、聞き手に聞き取りやすい返事と声の大きさを話している。	おおむね聞こえる声の大きさと理解できる返事で話している。	話すスピードや声の大きさに難点がある。

パフォーマンス課題を評価するために、CAN-DO リストに基づいたルーブリックを作成した。ルーブリックの文言については、児童がその結果から、「頑張りたい」と思える、学習改善につながるものができるように、「～することができない」という表現を極力避け、手立てにつながる表現を採用した。

(4) 単元目標・自己目標・振り返りシート

<実践用> New Horizon Elementary ⑤
Unit5 単元目標・自己目標・振り返りシート

No. () Name ()

Unit 5 最終目標(単元目標)
場所をたずねたり答えたりすることができる

1. 自己目標(これからの学習でさらに、できるようになりたいことは何ですか。)

各時間の目標	振り返り
1. 先生の家の近くにあるものについて おおよその内容を理解することができる	😊😊😊😊😊😊
2. 場所をたずねたり、答えたりするやり取り おおよその内容を理解することができる	😊😊😊😊😊😊
3. 探し物をたずね合うことができる	😊😊😊😊😊😊
4. 教科書の地図を使って 道案内することができる	😊😊😊😊😊😊
5. 町にあったらよい場所カードを使って、 オリジナルマップで道案内することができる	😊😊😊😊😊😊
6. 自分のお気に入りの場所を 道案内することができる	😊😊😊😊😊😊

<実践用> New Horizon Elementary ⑥
Unit4 単元目標・自己目標・振り返りシート

No. () Name ()

Unit 4 最終目標(単元目標)
夏休みの過ごし方を発表することができる

1. 自己目標(これからの学習でさらに、できるようになりたいことは何ですか。)

各時間の目標	振り返り
1. 先生の夏休みの出来事を聞いて おおよその内容を理解することができる	😊😊😊😊😊😊
2. 夏休みの過ごし方のやり取り おおよその内容を理解することができる	😊😊😊😊😊😊
3. 夏休みの思い出やその感想を たずねあうことができる	😊😊😊😊😊😊
4. 記録メモを使って、夏休みの出来事 を紹介することができる	😊😊😊😊😊😊
5. 夏休みの出来事の発表原稿、資料 を作成することができる	😊😊😊😊😊😊
6. 夏休みの出来事について発表を することができる	😊😊😊😊😊😊

単元目標を達成するために、自己目標を設定させた。これは、児童一人一人が単元目標を達成するために自分に何が必要か、どのように学習したらよいかを考えさせるためである。単元目標については、津市版技能別CAN-DOリストを基に設定し、各授業の目標においては最終のパフォーマンス課題から各授業がつながるように筆者が提示した。

また、毎時間、授業の初めに前回の振り返りの共有を行った。他の児童がどのように授業を振り返り、今後どう学習を進めるのかを知ることでき、自ら学びの調整を図らせるためである。

毎回の授業で、授業初めに CAN-DO リストの確認と、授業終わりに振り返りを行った。そうすることで、児童が目標を意識して学習に取り組むことができ、教員も児童の振り返りから、目標に到達するために、どのような活動を行うのかを児童の実態に合わせて考えることができるからである。

振り返りシートには、文章だけでなく、判断指標に4件法の絵文字(😬 😊 😄 😁)を取り入れた。それらを用いたほうが児童たちに馴染みやすく、その時の感情をより適切に反映することができる考えたからだ。

単元の最後のパフォーマンス課題では、5回の授業の練習活動を通して、課題を行うことができた。5年生は、「道案内のやり取り」、6年生は、「自分がしたことについての発表」を行った。どちらも、評価の際には、ルーブリックを用いて、研究協力校の教員とともに学習到達状況を評価した。また、児童へのフィードバックは、ルーブリックの返却とともに、振り返りシートへのコメントで行った。

(5) small talk

small talk の活動を行い、英語力の定着を図った。単元目標に関連したトピックを用いて、最終目標を到達できる手立てとなる活動として small talk を組み入れた。5年生では、「What do you want for your birthday? (誕生日何が欲しいか)」、「What do you want for your town? (自分の町に何が欲しいか)」、6年生では、「Where did you go last Sunday? (先週の日曜日にどこに行ったか)」、「How was your holiday? (休日はどうだったか)」を毎時間2回違うペアで取り組み、1回の活動が終わるごとに中間交流を行い、伝えたくても英語で表現できなかったことはないか確認し、改善を目指すように促した。

3 授業実践の考察

(1) CAN-DO リストの内容確認

CAN-DO リストを配付した時に、児童は興味深くリストを見ており、出来たところにチェックや色塗りを行っていた。児童のアンケートには、「自分のできていること、あまりできていないところが変わるようになった」、「次のことがみえるから、あらかじめ勉強することもできるようになった」という意見があった。

(2) CAN-DO リストの提示

掲示、ワークシート等で CAN-DO リストを確認する方法をとったが、児童用アンケートの「Today's Goal で、その日の授業で何を学習するかが分かりやすくなりましたか」の質問の回答から、51人中50人の児童が、その日の授業で何をすることが分かるようになったという回答があった。目標を意識づけするという意味では効果があったといえる。

(3) 最終課題と評価

5年生が「話すこと・やり取り」の課題、6年生の最終目標が、「話すこと・発表」の課題であった。

評価においては、ルーブリックを使用し、研究協力校の教員とともに行った。ルーブリックを使用することにより、評価のずれがないようにした。CAN-DO リストを基に評価することにより、信頼性と妥当性の高い評価が可能となった。

(4) 単元目標・自己目標・振り返りシート

自己目標の設定では、単元目標を設定するために、自分が苦手としているところを目標として設定させた。何を書いてよいのかわからない児童もいたので、振り返りシートにヒントとなる説明を書いたり、本人とともに考えたりして自己目標を設定した。

<5年生の自己目標>

基本の徹底	「英語で場所を言えるようになりたい」	7人
4技能の向上	「英語を理解してしゃべれるようになって道案内する」	5人
正確性の向上	「間違えずに聞いたり、案内できるようになりたい」	4人
流暢性の向上	「人が聞き取りやすいように英語をしゃべりたい」	3人
実践の場での活用	「外国の人に場所を聞かれても、英語で答える」	2人

<6年生の自己目標>

4技能の向上	「もっと英語をすらすら読んだり言ったりしたい」	15人
流暢性の向上	「英語をつまらずに話せるようになりたい」	7人
発音の向上	「発音をきれいにいいたい」	4人
発表の質の向上	「笑顔で発表できるようになりたい」	2人
基本の徹底	「英語を覚えたい」	2人

5年生は、実際に外国語の人に道を聞かれて答えられるようになりたいという目標から、まずは、英語で場所を言えるようになりたい、道案内で答えることを頑張る等、それぞれの児童が単元目標に達成するために自己目標を設定した。6年生の自己目標については、単元目標について触れられているものが少なく、事前の説明で筆者が意識づけすることが出来なかったことが課題であったので、今後意識していきたい。

各時間の目標	振り返り
1. 英語のやり取りを聞いて理解することができる。	
2. 美里の道案内を聞いて場所がわかる	道案内をきくこと かまわずに 聞いた
3. 探し物をたずね合うことができる	少しだけできるように なった Good!!
4. 道案内を聞いて場所を選ぶことができる	かんぱきに来れるように なった すばらしいや!!
5. お気に入りの場所やあったらいい場所について地図を使って伝え合う	だんだんわかってきた おもしろい
6. 地図を見て道案内することができる	かんぱき Great!!

左の児童は、最初「道あんない（英語の聞き取り）を聞くことがむずかしかった」という自己評価をしていたが、次回の授業では、「すこしだけできるようになった」、「だんだんわかってきた」、「かんぱき」と授業の回数を重ねていくにつれて、理解度が進んでいる様子であった。また、最終の授業時の振り返りの時に、振り返りの4件法を見て、徐々に右側の絵文字に丸がついた振り返りシートを見て、「だんだんできるようになってきたのがわかった」という感想を聞くことができた。

(5) small talk

中間交流では、自分が伝えたくても伝えられない表現についてたくさん質問が出て、全体で共有した。5年生、6年生がそれぞれ最終課題に向けた目標に関連するトピックの表現の練習できたことで、最終課題に向けて少しずつ自信をつけたことが振り返りシートから分かった。

4 授業後の児童用調査の内容と結果分析

1、CAN-DO リスト児童用調査

IVの授業実践の活動を通して、CAN-DO リストを活用した授業を行ったが、児童がCAN-DO リストを活用した授業を受けてどのように感じたのかを調べるため、調査を実施した。調査項目については、津市内の英語担当者に行ったCAN-DO リストの調査結果の「CAN-DO リストの効果について」の結果を参考に以下の4点を仮説として立て、質問文を作成した。

- ・CAN-DO リストを活用することで、児童はその日の授業で何を学習するかが分かる。
- ・CAN-DO リストを活用することで、見通しを持って学習することができる。
- ・CAN-DO リストを活用することで、意識づけ、動機付けになる。
- ・CAN-DO リストを活用することで、自己調整・主体的な学びへの役立ちになる。

最終授業時に、5年生（21名）、6年生（30名）を対象として実施し、合計51名から回答を得た。

(1) CAN-DO リスト、Today's Goal で、その日の授業で何を学習するかが分かりやすくなりましたか？

	よく分かるようになった	ちょっと分かるようになった	あまり分からなかった	全く分からなかった
5年	16	4	0	0
6年	16	13	1	0
合計	32	17	1	0

- ・わかりやすく、まとめてあって、わかりやすかった
- ・前より確実にうまくいえるようになった
- ・各時間の目標があるから何をするかよく分かった
- ・前より英語が分かるようになった
- ・自分の手元に目標があることで、確認することができた

この結果から、50名の児童が分かるようになった、ちょっと分かるようになった、1名の児童があまり分からなかったという回答があった。児童が授業や活動で、どのようなことができればよいのかが明確になり、目標を意識して学習できたことが分かった。

(2) CAN-DO リストで、これからどんな学習をするのか分りやすくなりましたか？

	よく分かるようになった	ちょっと分かるようになった	あまり分からなかった	全く分からなかった
5年	11	5	1	3
6年	17	11	2	0
合計	28	16	3	3

- ・よく分かって学習に取り組めた
- ・目標がかんたんに書かれていたこと

44名の児童がよく分かるようになった、ちょっと分かるようになった、5名の児童があまり分からなかった、全く分からなかったという回答であった。この結果から、見通しを持って学習することが出来た児童が多くいることが分かった。また、分からなかったと答えた児童の理由では、1名が「英語自体がわからない」と答えており、残り4名の児童は空欄であった。CAN-DO リストは目標が簡潔に書かれているため、児童に伝わりづらい表現があったのではないかと考えられる。

(3) CAN-DO リスト、Today's Goal で、やってみたい、頑張ろうと思えましたか？

	思えた	ちょっと思えた	あまり思えなかった	全く思えなかった
5年	15	4	1	0
6年	17	13	0	0
合計	32	17	1	0

- ・目標みたいなのがあるとがんばろうと思える

- ・練習を何回もするようになった
- ・1つの目標を達成することで次の目標も頑張ろうと思えた
- ・目標を達成するために頑張ろうとなった
- ・最初はこれはむずかしいから無理とかあきらめていた部分もあったけど、紙とかを見るとやってやろう、がんばろうという気になった

49名の児童が思えた、ちょっと思えた、1名の児童があまり思えなかったという回答であった。この結果から、CAN-DO リストを活用することで、児童の学習喚起につながっており、児童の励みにもなっていることが分かった。

(4) CAN-DO リストで、自分ができたこと、もう少しでできることを知ることができましたか？

	できた	ちょっとできた	あまりできなかった	全くできなかった
5年	14	5	1	0
6年	16	14	0	0
合計	30	19	1	0

- ・徐々に🤖から😊にいけた
- ・次は何をすればできるかななども分かった
- ・自分が今できることできないことを知ることでもっと頑張ろうと思いました
- ・目標などを基に、その日できたこと、出来なかったことが分かった

49名の児童ができた、ちょっとできた、1名の児童があまりできなかったという回答であった。この結果から児童が CAN-DO リストで振り返りの観点が明確になり、何が出来て、何が出来ていないのかが分かるようになったことが分かった。

(5) CAN-DO リスト、Today's Goal を使う前と後で、学習する時に変わったところはどこだと思いますか？

- ・目標があって分かりやすいし、目標があって夢中に授業に取り組めた
- ・目標ができて、それに向かってどうしたらいいかが分かる
- ・目標みたいなものがあるからがんばろうと思うようになれた(使ったら)
- ・前はそんなにきょうみがなかったけどきょうみがでた
- ・CAN-DO リストを使ってから英語がだんだんわかるようになってきた
- ・次の授業ですることが分かるから、きょうみをもてた
- ・目標があったから、目標を達成しようとした
- ・自分ってこんなに勉強できてたんかなっていうのが実感できるようになった
- ・めっちゃちょっとだけプレゼンがきらいじゃなくなった
- ・目標が分かっているから、目標に向かって努力するようになったところ
- ・次もう発表だからたくさん練習しようと思えるようになった

- ・各時間の目標があることで、その目標を達成しようという気持ちになったところ
- ・次のことがみえるから、あらかじめべんきょうすることもできるようになった
- ・使う前はべつにどうでもいいやみたいな感じだったけど、学習していくなかで、けっこうつかうなあ、大事やなあと思った

このような記述から、CAN-DO リストを活用した後には、児童にとってやるべきことが明確になり、見通しを持って学習に臨むことができ、学習喚起や動機付けになり、学びの履歴にもなることが分かった。

児童用調査の結果から、児童の多くが、CAN-DO リストによって、やるべきことが明確になり、見通しを持った学習ができるようになったと実感していることが分かった。また、CAN-DO リストを使った後に学習に好影響を及ぼしているという結果も出た。何が出来て何が出来ていないのかという到達度の確認ができたという児童もいた。また、最終課題の発表に対して苦手意識を持っている児童がいたが、スモールステップで少しずつ出来るようになったことが自信になり、皆の前で発表を出来た児童もいた。

V 研究の成果と課題

授業実践から、以下のような成果と課題が明らかになった。

<成果 児童生徒の学習改善の点>

- ・単元目標を設定することで、児童が見通しを持って主体的に学習に取り組めるようになった。
- ・CAN-DO リストが、学習者が「自分の今の状態」を認識するツールとなっていることがわかった。今の自分と過去の自分を比較して何ができるようになったのかを内省、表出することを通して、ゴールに向けて何をしなければならないかを考えることができた児童もいた。
- ・CAN-DO リストを授業で活用したり、児童生徒と共有したりすることで、児童生徒の学びも豊かになっていき、自律的学習者を育てることができたと思われる。

<成果 教員の指導改善の点>

- ・振り返りシートを通して、児童の学びの姿勢や達成感・困り感を把握して、指導に活かすことができた。
- ・教員が単元目標を意識することで、そこに到達するための単元構想に役立った。
- ・CAN-DO リストが教員間の共通理解の指標になり、評価の際に児童生徒と共通認識を持つことができた。

<課題 児童生徒の学習改善の点>

- ・児童用調査の結果から、CAN-DO リストの効果が理解できない児童がいることが分かった。リストの意義が児童生徒に理解されていないことによって関心が薄い場合もある。そのような児童に対して、まずは教員が CAN-DO リストを十分把握し、児童が分

かりやすい言葉で伝え、支援していくこと大切である。

・CAN-DO リストで掲げられたことができるようになったのかを自分で判断することが難しい児童がいた。そのような児童に対して、授業の取組の様子から出来ていたところ、難しく感じていたところを教員がその児童と共有したり、児童同士で伝え合うことによって、適切な自己評価につながっていくのではないだろうか。

<課題 教員の指導改善の点>

・英語担当者へのアンケートの結果でもあったように、時間の無さは大きな課題である。しかし、CAN-DO リストの有用性を理解することによって、有効な活用が広がることが期待される。

VI おわりに

本研究の目的は、「市内の教員が、CAN-DO リストを効果的に活用し、来年度以降の本市における外国語科・英語科の教員の授業改善と児童生徒の学習改善の充実につなげること」である。

授業の構成をバックワードデザインで行うことにより、教員や児童が見通しを持って授業に臨むことができ、教師と児童がゴールを共有することにより、お互いにやるべきことをはっきりと意識しながら授業に取り組むことができた。

CAN-DO リストを授業で活用したり、児童生徒や学校間等で共有することが、学びの連続性、言語活動の充実にもつながる。目標を共有することで、児童生徒の学びも豊かになっていき、自律的学習者を育てることが期待される。

「令和の日本型学校教育」にも提示されている「9年間を見通した新時代の義務教育の在り方について」でも述べられているように、CAN-DO リストを活用した、小中連携が実現し、児童生徒の学びが広がっていくことを願っている。

最後になりましたが、本研究にあたり、ご指導・ご協力いただきました研究協力校の校長先生、市内小中・義務教育学校の教職員のみなさま、長崎大学副学長の中村典生教授に心から感謝申し上げます。

VII 引用及び参考文献

・文部科学省『令和の日本型学校教育』の構築を目指して
～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf

・文部科学省

『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』（2013）

・文部科学省

『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定に関するQ&A（第二次案）』（2013）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/092/shiryo/_icsFiles/af

ieldfile/2013/03/05/1331288_4_1.pdf

・文部科学省 『英語教育実施状況調査』(2021)

・文部科学省 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』(2017)

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_1.pdf

https://www.mext.go.jp/content/20220516-mxt_kyoiku01-000022559_2.pdf

・文部科学省 『中学校学習指導要領解説外国語 編』(2017)

・英語教育 大修館書店 (2019年4月号 2020年3,6月号 2021年2月号 2022年3,6,8月号)

・英語教育 2022年8月号別冊テスト・評価のアップデートマニュアル 大修館書店

・中学校英語 CAN-DO リスト作成のための手引き 教育出版 (2015)

https://www.kyoikushuppan.co.jp/docs/h28chugaku/eigo/pdf/candotebiki_Eng.pdf

・三重県英語教育改善プラン 三重県教育委員会 (2021)

・熊本県版『Can-Do リスト』形式による学習到達目標

熊本県版『Can-Do リスト』形式による学習到達目標 (例) 熊本県ホームページ

・投野 由紀夫編 『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』(2013)

・バックワード・デザインによる『指導案改善』研修のすすめ

一本気で、今の授業を変えたい人へ—<http://www.e-pros.jp.com/report/view/40>

・西岡加名恵編著 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書 (2008)

・阿野 幸一・太田 洋著 『日々の英語授業にひと工夫』大修館書店(2011)

・阿野 幸一・太田 洋著 『これからの英語授業にひと工夫』大修館書店(2022)

・田中 博之著 「主体的・対話的で深い学び」学習評価の手引き 教育開発研究所 (2020)